

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第五十一弾

神社本庁再生への道—その十四
神社本庁は「天地の公道」を歩み、
全国神社及び国民との信頼関係を再構築せよ!

新型コロナウイルスの第六波もようやうだが、コロナ対策をめぐる一連の混乱は、日本社会の構造的欠陥と、それが噴出する根本要因とを明確に知らしめてくれた。

政府のコロナ対策が迷走を続けた最大の要因は、国民との信頼関係が損なわれていたことにある。いや、ある程度の内閣支持率は維持してきたというかも知れないが、「信頼」と「支持」は異なる。国民の多くは、政府の目線が国民全体ではなく一部の方向しか向いていないことを、今もすっかり見抜いている。

藤原登 (フリーライター)

感染拡大が起る度に、病床の切迫と保健所の機能麻痺が伝えられ、今も大阪をはじめ東京などでも深刻な状況が続いている。しかし、政府がこの問題の解決にイニシアチブを発揮した様子は窺えない。

拳動が明らかでない新型ウイルスへの対策が困難であることは十分に理解できる。しかし一番の問題は、この間に総理が二人も代わったものの、彼らの発する言葉が、国民の健康や暮らしを守るための力強い決意やメッセージとして伝わってこなかったということだ。我々の耳に残っているのは、「スピード感を持って」「科学的知見に立つて」「安心安全のために」などの修飾語ばかりである。そして、

その時点で、元部長二人に極刑を含む処分を下した張本人の田中総長をはじめ、本庁執行部を裏でコントロールしてきた神道政治連盟打田会長らの当事者たちがどんな動きを見せるか注目される。特に五月には神社本庁の評議員会、六月には神道政治連盟の中央委員会が開催されるが、共に任期満了による役員改選が実施される予定だ。これまでの流からすれば判決確定などお構い無しに、田中、打田両氏は総長や会長の再選を狙うことだろう。すでにその工作は始まっていると見てよい。

五箇条の御誓文であり、帝国憲法の発布も帝国議会の開設も御誓文の理念に拠るものであることは言うまでもない。すなわち理念を以て人心を一つにし、国家の独立を全うできたのである。それも明治維新前史の白黒付け難い国内状況に比べれば、神社本庁の現状は極めて白黒が明確である。神社界五十年のため「天地の公道」に基づき神社本庁正常化の理念を明示すべき時が来ている。

全国神社関係者に訴える

そこまで考えなければ、神社本庁の正常化を成し遂げることが出来ないだろう。事態は極めて深刻だからだ。筆者の耳にも神社本庁や神社庁のみならず、一部の神職により私物化されている神社の情報が伝わってくるが、現在進行中と思われる案件だけでも両手に余る。それを指し改善をはかるのが神社本庁の役割のはずだが、本庁自身が疑惑にまみれ、一部では疑惑神職との結託さえ噂されている。一般の神職の方々は、こうした状況を如何に考えているのか。一番の被害を被っているのは、

「天地の公道」を示せ

神社界の

「安心安全のために」などの修飾語ばかりである。そして、あなたも飲食店のみが感染源であるかのように時短営業や酒類提供の自粛を求め続けたが、実際どれ程の効果があったのだ

神社本庁が再生するか否か、最後のチャンスであるが、これは田中、打田両氏を排除するだけで解決する問題ではないことを関係者は肝に命じておかなければならない。ここで神社本庁設立の目的を再確認し、関係者結果し得たからだ。その象徴が

藤原 登 (ふじわら のぼる)

昭和二八年、東京に生まれる。昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。